

スリランカのゴールデンビーチは、内戦終結後は安心して行けるトリンコマリーエリアだとタランガッレ・ソーマシリ師がいわれていた。最近、マスコミが東海岸を紹介するようになり、トリンコマリーの魅力の数々が一般の人に知られ始めた。2009年、26年に亘ったスリランカ内戦状態が最終的に終了して以来、この地の観光産業の可能性が群を抜いて注目されている。恐らくトリンコマリーは、今後のスリランカの経済発展に大きな力になっていく予感がする。

トリンコマリーの表情

タミル・イスラムの解放の虎(LTTE)による内戦が終わった。そして、スリランカの海洋風景の無垢な美しさが人々の目を引くようになったが、実は、『東方見聞録』のマルコポーロや『三大陸周遊記』のイブン・バトゥータらの、歴史を紐解くキーパーソンが共に感動した島である。また、ある時代には良港を備えもった湾岸都市は、諸外国の交易の足場として逆に目を付けられて支配下に置かれてきた。第二次世界大戦中には英国海軍基地として使用された為、日本軍は空襲を行い、コロンボとトリンコマリーに被害を与えた。

日本敗戦後のサンフランシスコ講和会議において戦勝国である連合軍は、日本に対して厳しい賠償と制裁措置を求めた。



コネスヴァラム寺院 (Googleパノラマから)

当時のスリランカ代表・ジャヤワルダナ大統領の演説は『法句経』^{注)}の仏陀の言葉『憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ愛によってのみ、消え去るものである』を引用して演説し、その流れを変えた。スリランカの仏の声が連合国の考えを動かしたといえる。

2013年10月中旬、「今こそ行き時」とばかり、私たちはスリランカの東海岸をドライブした。

運転を引き受けて下さったソーマシリ師の友人が「内戦により外国人の立ち入りが制限されていたので、綺麗な砂浜が残っていたんです。ところが、あのスマトラ大地震の大津波がトリンコマリーに押し寄せました。実は、あの日、この海岸のホテルの2階に泊まっていたんです。1階にいた人は波に呑まれたり、流されてなくなりました。あっという間の出来事でした」と詳しく話してくださいました。スリランカ全域に及んだ津波被害だが、特にトリンコマリーは大きかった。「2009年5月に、日本企業で建設したTUNAMIハウスがありますが、日本の建て方がしっかりしてして評判がいいです」とも言われた。

そんな傷跡を忘れたかのように波は純白、海は透明感のある紺色で見事な対照を見せていた。長く続くベージュ色の砂浜を歩いてみた。汚れのないビーチの美しさに溜息が出た。

ヒンドゥ教の彩り

素朴さを残す小規模なゲストハウスが並んでいる通りから一歩横に入った通りは発展途上に見える。車の中から周辺を見まわしているとタミル人の行列に出合った。何処とはなく賑々しく派手派手しい彩である。小さな町村のお祭らしく、カラフルな飾りを付けた車を囲んで歩くのはタミル人である。太鼓や吹奏楽器が鳴り響き、神様が神輿に載せられて巡回して行く。

ヒンドゥ教の神々は、現世の願い事を叶えてくれると信じられている。仏教寺院には必ずと言っていいほど祀られていてスリランカの人々の生活にも密接に絡んでいる。

雨が小降りになった時、駐車場らしいところに車を置いてぬかるみの参道を歩いた。お土産物、供物などを売る店もそろそろ店じまいであった。タミル人の露店に並ぶ食品はどんなんものが売られているのだろうときよろきよろしながら見て回った。「コネスヴァラム寺院」入口で素足になった。寺院の説明によれば、スリランカには2000年も前からヒンドゥ教寺院が五つあったそうで、その中の一つがトリンコマリ聖地にあるこの寺で、通称「千の柱寺院」と呼び、南インドから来たチョーラ朝やパンディ朝、パラツヴァ朝等により祀られていたがポルトガルにより壊れてしまったという。その後、海に沈んでいた柱や市街に埋められていたご神体を集めて再建され、目前の形になった。彫り物や飾り物はインドのヒンドゥ寺院とは少し異なりスリランカ風に見える。寺の外を回ると海が一面に広がって爽快な気分になった。まだお参りの人も残っていて、この場所はタミル人の憩い処であると思う。

忘れられた仏跡で

2000年あまりの歴史がある仏教遺跡に向かった。その遺跡は歴史とともに密林の中に埋没してしまったとソーマシリ師から聞いた。碑文によれば起源はアヌーラタブラのデーワナンビヤ・ティッサ王による菩提樹の植樹である。その後タミルの王を含む歴代の王たちにより建築され、再建されたてきた。11世紀にシンハラ王朝の衰退時にこの地域に住んでいた仏教徒は南に追いやられて、とうとう遺跡は埋もれて忘れられてしまった。「おや？」と思うことは、タミル人の王も仏教に心入れをされて仏教保持に努めたということである。ということは、シンハラ人、タミル人を問わずスリランカ人の精神の底流には「仏



トリンコマリ海岸 (Googleパノラミオから)

教]があるといえよう。

遺跡のかたわらには寺院と菩提樹があった。タミル人がこのあたりの人を襲撃し、破滅に近い打撃を与えた。タミル人のこのテロから辛うじて完璧な破壊を免れていた仏教遺跡を甦らせたのであろうか。仏塔や石柱、足元に見る彫刻など王朝ごとの遺跡を見渡しながら、遺跡脇に建つ寺の住職にお目に掛った。ご自身も腹部を刺され九死に一生を得たとのこと。大きな傷痕を拝見し、その惨さを痛々しく思った。食事の布施を行う檀家もなく、ご自分で料理をされる寺生活とのことである。逃げたタミル人が置き忘れたビデオを来訪者に見て貰うとともに、その悲惨さを写真パネルにして展示し、再建のための寄付を募られていた。

青々と茂る草木の中の遺跡群や展示会場となっている寺院。身を以て体験したテロの恐怖を伝え、併せて仏の教えの大切さを訴える住職が眩しく見えた。この住職の姿から、何時の時代でもスリランカでは仏教思想が国民を支え、仏教思想が未来への希望をつなげていると確信できた。

■注

『法句経』(ほっくぎょう):または『ダンマパダ』(パーリー語: Dhammapada)は、原始仏典の一つで、釈迦の指針的な語録の形式を取った経典である。語義は「法(真理)についての句(言葉)」といった意味であり、原始仏典の中では最もポピュラーな経典の一つである。

(ウィキペディア)